

母校に勤務して

旧職員 丹 保 重 雄

平成十一年十二年の二か年母校山城に勤務しました。

私が山城の生徒であつた昭和三十年代は、山城は自主活動に勉強に生き生きと光り輝いていた時期ではなかつたかと思ひます。部活は野球、サッカー、バスケット等は全国レベルで活躍していたし、生徒会も六十年安保のときには授業をカットしてアッセンブリーをするなど活発でした。政治意識も高かつたと思ひます。こんなこともありました。眠い六時限目の授業中、ある生徒が突然「浅沼が刺された」と叫び、教室は騒然となりました。政談演説会の壇上で社会党の委員長が右翼少年に暗殺されるといふ事件が起こつたのです。この生徒は当時まだ珍しいトランジスタラジオを授業中聞いていたようです。（聞いていたのは演説ではなく日本シリーズだった？）

昭和四十三年、私は教員に採用され峰山高校の定時制夜間の教師として出発しました。母校山城は九つ目の勤務校であり、

八つ目は洛北でした。洛北は明治三年の創立。その歴史に圧倒されました。旧校舎にそのまま残っていた奉安殿は書庫として使われ、中には明治・大正時代の学籍簿が収納されていました。この頃三中設立時に一中分校生徒が三中に多数転校したことを知りました。洛北勤務の経験はその後の生活に大きく役立ちました。

平成十一年の山城転勤は胸ふくらむ思いと同時に身ぶるいする思いでした。私の記憶にある当時の山城は京都のみならず全国に誇れる名門校でしたから。

二年間、教頭として勤務しましたが、教師生活のなかで最も充実した二年間でした。転勤した当時、洛北でもそうでしたが、山城も校舎改築の真っ最中でした。毎日忙しい日々でしたが、校長に思い切り任せていただいたこともあり、毎日が面白く胸を張って仕事をしました。

こんな面白いこともありました。ある年、一年生の社会人講演に吉田義男先輩をお招きすることになりました。一年生だけではもったいないので、北野中学（吉田さんの母校）の三年生も呼びました。吹奏楽部が吉田さんの入場には六甲おろしを、北中生の入場には北中校歌を演奏し盛り上げました。吉田さんの山城時代の話は大変興味深いものでした。母校の凄さを生徒に伝えて頂きました。

山城は明るい学校、中学生に人気のある学校です。船に例えると貨物船ではなく、外洋航路に行く白い船体の客船だと思えます。しかし、よく見ると船体のあちこちに錆が出ていました。自由でのびのび、これはいいんですが、楽しい高校生活の先は浪人では、生徒・保護者の期待に応えたことにはなりません。多くの教職員は危機感をもちました。

山城の目標は、自由な雰囲気の中で、勉強に部活に活発な文武両道の山城の復活です。当時の大きな課題は、出口での希望進路の実現でした。校長を中心に教職員が一丸となって校務分掌組織の改変、各部の数値目標の設定などさまざまな取り組みを始め、教職員の意識も変わってきたと思います。しかし、校舎は全面改築されましたが、目に見える成果はこれからです。

私は昨年定年で教師生活を終えました。今までの人生を振り返ると、無数の偶然との出会いがあり、その都度その中から選択しそれを繰り返し、今日までできたように思います。いま思うと、私が母校山城に勤務できたというのは夢のような出来事です。高校時代のあの日あの時を思い出すと今でも胸が熱くなります。母校の更なる発展を願って止みません。